

ネコヤナギ（エノコロヤナギ、カワヤナギ）

牧 幸 男

二月になると日脚のはびてくる。しかし、気温の上昇がそれほど肌を感じないので、まだまだ春は遠いと思ってしまう。このような季節でも、ネコヤナギは確実に芽を膨らませ、厚い光沢のある芽鱗が りんと呼ばれる皮を脱ぐように、絹毛を密集した白毛の花が咲きだす。猫柳は他のヤナギ類の開花よりも一足早く花が咲くので、春の訪れを告げる植物のひとつである。

猫柳は、エノコロヤナギ（狗尾柳）やカワヤナギ（川柳）とも呼ばれるが、カワヤナギは江戸時代まで呼ばれていた名称で、明治以降は銀色の花穂の姿を猫の尻尾になぞらえて、猫柳と呼ぶようになった。

猫柳は中国、朝鮮半島、日本に自生するヤナギ科の植物で、暖かく湿潤な環境を好み、他のヤナギ類よりも水際に生育し、株元は水に浸かるところに良く育つ。我が国では山間部の溪流から小川まで、広く川辺に自生する落葉広葉樹の低木である。自生地が氷辺なので乾燥しやすい場所を好まないが、耐寒性、耐暑性に優れた植物である。ヤナギ科の植物は非常に種類が多く、400種に及んでいるが、自然交配種も多く生じているので分類は難しいとされている。日本には約40種、それと自然交配が数十種知られている。猫柳はその代表である。

猫柳は、樹高1～4m、樹形は枝が立つものと這うものがある。樹皮は暗灰色で、皮目が散在する。一年枝は褐色や緑褐色で毛が多く、小枝は折れにくい。雌雄異株で、花は上半反部分が黒色で先が尖り、披針形をしている。早春に葉に先立って赤い鱗片を脱ぎ、雄株と雌株がそれぞれ異なる花を咲かせる。雄花序ゆうかじょの長さは約4cmで紅色の葯から黄色い花粉を出し、花糸は2本合着して1本に見える。雌花序しかじょは長さ約4cmで雄花序よりも細い。雄雌とも花穂に銀白色の絹毛があり、よく目立つ。花穂は小さな花の集合体で、へら状の小さな苞に、



枝が縦に伸びる猫柳



枝が横に伸びる猫柳

雄花は約3cmの花穂を咲かせる。雄花は花穂に黄色の花粉を付け美しい。一方、雌花の成熟した種子りゅうじょは柳絮と呼ばれ、白毛があるので春風の中を雪のように舞う。中国では春の風物詩であるが、わが国では湿気が多いため、雪のように舞うことは少なく、樹下に留まってしまうことが多い。

園芸植物として人気があり、品種改良が進み、枝の立っている普通種をタチネコヤナギ、枝の下垂する変種をハイネコヤナギ、葉に斑の入ったファイリネコヤナギ、花穂の毛が黒色のクロヤナギなどが生まれている。花の姿の美しさから庭木や生花の材料として親しまれている。

『万葉集』（629～759）に「川楊、河楊」の名で早春の河畔の趣を詠んだ歌が4首登場している。その一つを示すと

山まの際に 雪は降りつつ しかすがに この河川柳は もえにけるかも 作者不詳

がある。古くから日本人の間に早春の植物と親しまれていたが、猫柳の名前が詩歌に詠まれるようになるのは明治になってからが多い。



猫柳 雄花序

霧雨の 細かにかかる 猫柳 つくづく見れば 春たけにけり 北原白秋

白猫の やうな柳も お花哉 小林一茶

植物名について、牧野富太郎博士は「ネコヤナギは花穂を猫の尾になぞらえたもの。カワラヤナギは水辺に生えるからで、エノコロヤナギは犬の子をヤナギと言う意味で、花穂を犬の尾になぞらえたものである。漢名の水柳胡別もの。」と述べている。別名には川楊（古名）、河楊（古名）、谷川柳、水楊等沢山あり、いずれも生育場所に由来している。身近な植物だけに地方によって呼称が異なり、「ネコネコ」「ネコジャラシ」「ネコノマクラ」「ニャンコノキ」といったネコと結びついた呼称や、「イヌコロ」「エノコロ」「インコロ」「イノコロヤナギ」といったイヌと結びついた呼び名も知られている。また、東北地方では「ベコ」「ベコベコ」「ベコヤナギ」といったウシと結びついた呼称もある。植物名について折口信夫博士は、ヤナギの名の由来について、矢を作る「矢の木」から出たというのは俗説である。「^ゆ齊の木」から出たものだ。苗代に水口^ゆに挿して、田の神の依代にふさわしい木だからと記述している。学名は *Salix gracilistyla* で、属名はラテン語の古名で、恐らくケルト語の *sal*（近い）+ *lis*（水）からきた合成語だろうと言われている。種小名は花柱が細長い意で、水辺に多く生育し花柱が細長い意である。

我が国の薬用使用例はないが、お正月の雑煮を柳の箸を使うと長寿になると言われていた。また、柳で作った楊枝^{ようじ}を使うと歯が「うずかない」という伝承もある。「ようじ」を漢字では楊枝^{つまようじ}、爪楊枝と書くように柳の枝を使ってきた事は、歯痛効果があったのだろう。ヤナギ科の鎮痛作用はギリシア時代から知られていた。ヒポクラテス（BC460 頃～BC370 頃）はヤナギの樹皮を熱や痛みを軽減するために用い、葉を分娩時の痛みを軽減するために使用した記述がある。ペダニウス・ディオスクリデス（40 頃～90 頃）著の『薬物誌』（77）に「ヤナギの葉を砕いて少量の胡麻と葡萄酒と共に服用させると、疝痛にくるムシ患者によく効く。」と記載がある。中国では古い時代に柳絮を羊毛に代えて^{じよく} 毳をつくり、小児を寝かせると良いと、歯痛にヤナギの楊枝や歯ブラシに使っていたと伝えられている。恐らく、ヤナギの鎮痛作用による効果であろう。このような伝承を参考に樹皮成分を最初に研究したのは、イタリアの化学者ラファエレ・ピリア(1813～1865 年)である。その後、柳の樹皮から有効成分が分離され、柳のラテン語が *salix* であることからサリシン *salicin* と命名された。1897 年にバイエル社のフェリックス・ホフマンがアセチルサリチル酸を合成する事に成功した。このアセチルサリチル酸（アスピリン）は、世界で初めて人工合成された医薬品である。

猫柳の樹液は甘みがあるので、甲虫、鋏形虫、黄金虫等が集まることが知られている。

通常猫柳を含むヤナギ類には、枝が立つヤナギ類と枝が下垂するシダレヤナギ類があり、前者に「楊」、後者に「柳」の字をあて区別している人もいる。

花言葉は「努力が報われる」、「自由」、「思いのまま」、「親切」等がある。

猫柳は花が終り、葉が生じる頃から、関心を示す人が殆どいなくなる。華やかさと孤独の両者を兼ね合せた植物かもしれない。

